

星がつなげる多世代居場所づくり「都会の天体観測」

取組の背景・目的

【背景】

コロナ禍では人と人との接触や交流が制限され、児童センターにおいても乳幼児親子と小学生の受け入れ時間を分け、中高生の来館を制限したこと等から、多世代での交流の場が途絶えてしまいました。また、令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、館運営の制限が大幅に緩和されましたが、多世代での交流は以前のように戻っていない状況でした。

伊藤児童センターは品川区25館の中で一番小さな児童センターですが、広々とした屋上があり、来館者は外が暗くなってもバスケットボールやドッジボール等をして遊んでいます。このような伊藤児童センターの特長を活かすこと、多世代の居場所づくり等を目的に「都会の天体観測」事業を実施しました。

※この事業の企画立案者は、東日本大震災を経験し、震災直後に見上げた「星空の美しさについての感動体験」があり、そのような感動を家族や友人と共有し、コミュニケーションを取るきっかけにしてほしいとの思いがあって事業提案をしました。

【目的】

- ・宇宙について知るきっかけを作る。
- ・子どもたちの興味・関心を引き立て、児童センターの利用促進を図る。
- ・異世代交流の場を提供し、居場所としての定着を進める。
- ・中高生の来館率向上を目指す。

取組の概要

【実施日時】月に一回 土曜日 午後5時～6時（令和6年11月9日より事業開始）

【会場】伊藤児童センター 屋上

【対象】乳幼児から中高生およびその保護者等

【講師】事業指導員 山岸 朗 氏(すまいるスクール=放課後児童クラブ等で講師の実績有り)

【内容】望遠鏡を設置し、月や星を観察する

工夫点・留意点

- ・事業実施前に、全児童センターに呼びかけ、職員向けに望遠鏡操作研修を実施しました。共有物品の望遠鏡の使用率が著しく低かったが、少しずつ利用する館が増えています。
- ・当事業をきっかけに児童センターに気軽に足を運んでもらえるよう、事業参加の対象者を0歳～18歳およびその保護者としました。
- ・雨天時も事業が実施できるよう室内でのプログラムも準備しました。

取組の実績

- ・令和6年11月9日(土) 晴時々曇り 計52名 (乳幼児16名、小学生13名、中学生1名、大人22名)
- ・令和6年12月7日(土) 曇り 計70名 (乳幼児16名、小学生26名、中学生1名、大人27名)
- ・令和7年1月11日(土) 晴 計47名 (乳幼児15名、小学生10名、中学生0名、大人22名)
- ・令和7年2月8日(土) 実施予定 ※3月～10月は閉館時間までに日没にならないため実施せず。

取組の効果

- ・事業実施日は通常の土曜日比で約1.5倍の方が来館しています。事業開始前に館内で遊ぶ乳幼児親子も多く、小学生以上の児童の保護者が久しぶりに来館し、センターの事業に再び興味を持つ様子が見られました。
- ・回を重ねるごとに天体に興味を持つ参加者が増え、自主的に調べたり、指導員に質問したりする様子が見られました。
- ・子ども達だけでなく父親・母親の反響も大きく、親子での利用が大幅に増え、中には祖父母と一緒に来館する家庭もあり、3世代での交流もみられました。「家族そろって参加できるイベントで嬉しい」、「気軽に星空を見ることが出来て良かった」という声をいただきました。
- ・屋上で遊んでいた児童が、月や星がきれいだと言い、遊びを中断し星空を眺める姿を見かけることが増えました。中には屋上に寝転がり空を眺める児童もいます。
- ・地域住民から事業へのボランティア参加の申し出がある等、地域住民がセンター事業にかかわるきっかけをつくることができました。



課題・今後の展開

- ・ボランティアで事業の運営協力をお願いできる方がいることから、今後も講師として活躍していただけるように関係を築いていきます。
- ・共有物品の望遠鏡が老朽化しており、メンテナンスは指導員にお任せしています。今後は職員が指導員から操作やメンテナンスの方法をしっかりと学ぶ必要があります。また、児童センター全体での事業展開について協議し、共有物品として買い替えの検討も考えられます。
- ・中高生世代は、事業への参加は見られても継続した来館には結びついていません。そのため、当事業以外にも中高生にとって魅力ある事業の実施や館運営を心掛け、中高生が来館したくなるような取り組みを幅広く実施していく必要があります。
- ・「児童館ガイドライン」改正に伴い、災害時のこどもの居場所としての機能がより一層求められることとなります。様々な災害が頻発する昨今、「空を見上げることで心を癒す」ことを災害後のアフターケアの一つとして提案できればと考えています。